

現代中国文化に見るネットワーク効果

福嶋亮大
Ryohiko Fukushima

1

現在の中国が世界に大きな作用を及ぼしていることは、すでに周知のとおりである。アメリカであれ、ヨーロッパであれ、日本であれ、急激に内需の拡大を続ける中国への依存を深めている。のみならず、今後も中国は僻地の住人に到るまでインターネットとケータイによる情報化が進み、生産性の向上と富のいっそうの蓄積、そしてその裏面としてのエネルギー問題や環境問題の深刻化が予想される。CNNIC (China Internet Network Information Center) の最近の調査(二〇〇九年七月)によれば、中国のインターネットのユーザー数はついに三億人を突破した。さらに、農村部におけるユーザー数も九五〇〇万人以上に及び、二〇〇七年度比で実に六〇%を超える増加率を示している。こうした情報化の拡大が、さらなる効率性アップに繋がることは明らかだろう。日本では相変わらず「嫌中」の声がインターネット上で大きい。好むと好まざるとにかかわらず、中国は現に存在して私たちの生に影響しているし、これからも当分はそうだと言うほかない。

そのような状況は、思想のあり方にも作用している。実際、一部の思想家は自らの国家観にさえ手を入れ始めている。たとえば、かつて冷戦崩壊前後に書かれた『歴史の終わり』のなかで、西洋流のリベラルな民主主義の全面的勝利を確信していたフランシス・フクヤマなどは、今や方針を転換し「世界各地でヨーロッパとは異なるさまざまな社会が生まれたのはなぜかという問い方はやめ、中国を「政治発展」の一典型と見なし、ほかの社会がなぜ中国モデルからはずれていったのかを問う」新著を構想するに到っている。*1これは、西洋のオーソドックスな歴史観を、ちょうど裏返しただのと言えらる。この主張はいささか極端であるにしても、しかし、必ずし

1 『中央公論』2009年9月号所収の講演

も変節というにも当たらない。もともとヘーゲル主義者の立場から『歴史の終わり』を著したフクヤマに言わせれば、ある意味では、その新著も正しき弁証法のプロセスを踏んでいるということになるだろうから。

ヘーゲルの思想に倣うならば、フランス革命とナポレオンの時点で一度歴史は完成し、伝統の枠楕はすべて相対化され、後はそのつどの現在から、そのつどの偶然の作用を受けた諸世代が立ち上がってくるということになる。自由と平等を万人にとつての権利とする以上、ときには動物も含めたすべての存在は——実際、「動物の権利」という意識を育てたのはフランス革命である——、伝統から切り離された抽象的なものとして出発し、自己を徐々に具体化するべく「自律」(自己完成)への道を歩んでいくことが許される。弁証法とは、歴史の重荷を欠いたその偶然性を、あたかも「必然」の事象であるかのように事後的に巻き取り、止揚していく戦略に他ならない。その際、個々人が(あるいは個々の社会が)いかなるルートで自己完成を目指そうが、そのルート間の差異はすべて程度問題にすぎない。

言い換えれば、ヘーゲルからコジエーヴ、フクヤマに到る「歴史の終わり」の議論は、基本的に、近代社会においてはすべての出来事は相対的な重要性しか持っていないということを示すものだ。そしてだからこそ、個人の、あるいは社会の自己完成の様式が示すそのつどの微妙で相対的な変化を、思想家は的確につかんでいかなばならない(その様式の変化を技術的側面と美学的側面のあいだで体系化しようとしたのが、いわゆるポストモダニズムだと言ってもできるだろう)。このアイディアに従うならば、中国の台頭の後には、まさに今フクヤマが試みようとしているように、その台頭を説明するに相応しい「歴史の原理」を世の中に吹き込めばよい。なぜなら、ヘーゲル主義者にとつての哲学とは、適切な原理を編み出すことによって、偶然の出来事を事後的に完成に導く作業Ⅱ労働なのだから。

ところで、こうした作業Ⅱ労働は、別に思想家の専売特許ではない。もう少し一般

的に言うと、現状の社会では、個々人の欲望がバラバラである以上、そのバラバラの状態は、特定の誰かの音頭によってではなく、ネットワークの挙動のなかで動的に縮約されていくのが望ましいという考え方が有力になっている（私は別のところで、その縮約の技術を「神話」と呼んでいる）。つまり、偶然を必然に変える「自己完成」の様式は、あくまでネットワークの振る舞いのなかで獲得されるというわけだ。その様式は、リベラルで民主的な統治技術の一つの魅力あるイメージとなりつつある。そして、今の中国というのは政治体制はさておき、文化のレベルにおいては、むしろ「歴史の終わり」以降の「リベラルな民主主義」の像をよく示してくれるところがあるときえ言える。

たとえば、二〇〇九年に日本語訳が刊行されたクリス・アンダーソンの『フリー』において、中国はブラジルと並んで無料経済の先駆けとして高く評価されるに到っている。「…」新しい世代の中国のミュージシャンは、不正コピー業者と戦うのではなく、それを受け入れている。不正コピーは、自分たちの作品をもっと多くの潜在的ファンに届けるための、コストのかけられないマーケティング手法だと考えるのだ。」² アンダーソンはここで「ネットワークこそが富の最大の源泉である」という趣旨の議論を展開している。彼の無料経済についての議論は、目先の利益を追求する以前にまずネットワークの事実性を成立させ、その後には収益化を企てる新しいビジネスモデルの威力を喧伝しているのだ。その観点からすれば、中国は「フリーミアム」（無料のコテンツを配信するコストがほとんど零に近づいた世界の経済原理の最先端ということになる）

日本ではもっぱら、中国と言え「海賊版の王国」というイメージに彩られている。むしろそれは間違っていないが——というか、より正確にはモノとしての海賊版は、インターネット上の不正コピー・不正アップロードの爆発的増加と裏腹にむしろ摘発が減っているようだが——、しかし、その状況をいたずらに否定的に捉えても益するところは少ないだろう。クリス・アンダーソンの考えるのであれば、日本産のサブカルチャーの不正利用は、中国の無料経済における先行投資、要は無料の



フランシス・フクヤマ
『歴史の終わり』
三笠書房、2005年



『中央公論』2009年9月号

2 クリス・アンダーソン『フリー』265頁



クリス・アンダーソン『フリー』
日本放送出版協会、2009年



『南京!南京!』2009年

プロモーションをやってくれているのだと発想を変えるしかない。実際、将来的に中国に日本のサブカルチャー産業が本格的に進出することになれば、漫画やTVドラマ、アニメがたっぷり時間をかけて文化として根づいていくことができるが、むしろ最大の恩恵になるだろう。というより、そうしたネットワークの組成がなければ、文化もビジネスもスタート地点にすら立てないと言ったほうが正確かもしれない。こうした状況は、一九世紀以降の流れで言っても、社会の構成原理の変遷史における一つのローカルピークを構成するものではあるだろう。かつて、偶然を必然に変えるのは、何か巨大な歴史的出来事、特に「悲惨な記憶」の共同体的運命的な共有だとされていた。それに対して、今日の世界では、偶然を必然に変える力を持っているのは、おそらくネットワークの動作である。だからこそ、ネットワークの密度を高めるフリーミアムの戦術が物を言う。

実際、これからいくつかの例から示していくように、現在の中国から産出されている作品においても、この種のネットワークの事実性が言う局面が増えている。結論から言えば、グローバル化と情報化の直撃を食らうなか、作品もまた、ネットワークの結晶化の原理をより露骨に示しているように見受けられるのだ。とりわけここでは、かつて「悲惨な記憶」（共同体の運命）を体現していたはずの歴史的固有有名が、形式的なネットワークとして扱われていく様子がわかりやすく示されている。これらの事例はおそらく、「歴史の終わり」の後の文化原理について考える上での一つのヒントとなるだろう。

続きは本誌で！